

## 「特色ある共同利用・共同研究拠点」中間評価結果

大学名	立命館大学	研究分野	文化情報学
拠点名	日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点		
学長名	吉田 美喜夫		
拠点代表者	細井 浩一		

### 1. 共同研究拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

#### [共同研究拠点の目的]

平成26年度は、人文学分野のデジタル・ヒューマニティーズ（DH）化、あるいは応用的な研究のためのデジタル技術導入が検討される、まさにニーズの頂点となると予想される。そこで、アート・リサーチセンター（ARC）は、このニーズの高まりを受け、国内外の人文学研究者と情報学研究者との共同プロジェクト、あるいは人文学・文化研究に情報技術を活用した応用的研究を飛躍的に活発化させるための共同プロジェクトを多数組織することを目指し、これまでの活動をより発展させ、広く門戸を開いた活動へと切換えていくことを決意した。

まず、本申請拠点では、人文学分野の研究プロジェクトが、DH型研究手法を取り入れた人文学の応用型研究を積極的に進められるように拠点の環境を準備する。これまでのように個々のプロジェクトが高額な予算を準備して外注したり、デジタル・アーカイブやWeb公開の設備や機材を準備したりするのではなく、共同で設備や備品を活用できるようにする。

また、本拠点が持つ豊富なデジタル・アーカイブ研究の経験やノウハウを共同研究者らと共有化し、人文系の研究者にとって過重な負担となるデジタル技術を効率よく取り入れて活用できるよう、設備だけでなく、人的な配備を行う。

このような研究環境の提供によって、日本文化資源のデジタル・アーカイブを飛躍的に拡大させ、構築される巨大データベースが人文学研究の底上げに寄与しうる活発な共同プロジェクト研究を推進する。

なお、本拠点では、闇雲に人文学のすべての分野を対象とするのではなく、ARCが蓄積してきた日本文化を対象とするデジタル・アーカイブに焦点を絞ることで、研究成果を闡明し、研究プロジェクト相互の成果物を有機的に連動させ、相乗的な学術効果をプロデュースする。そして、むしろ日本文化以外の分野にも応用できる具体事例となる共同の研究プロジェクト、ならびにデジタル・アーカイブを数多く成立させることを目指す。

そして、ひいては、DH型人文学改革の先導的な共同利用・共同研究拠点の1つとなることを目標とする。

#### [共同研究拠点における成果及び目的の達成状況]

共同利用・共同研究拠点として、研究環境（サーバ環境・デジタル化機器、活用ノウハウ提供体制等）の整備を行い、多くの共同研究課題・共同利用者にその環境を提供することができた。人文学系の共同利用・共同研究拠点においては、数件の共同研究課題の採択にとどまる例が多いのに比して、本拠点は各年度とも研究費配分型の課題だけでも採択数が10件を超え、平成27年度に開始した研究設備・資源活用型を合わせれば、年間20件程度の共同研究課題が活動している。そこでは、人文学系研究者が情報学系・工学系の研究者や企業と連携して研究活動を進めており、極めて活発な研究展開に成功した拠点といえる。

大英博物館、ボストン美術館、メトロポリタン美術館といった世界有数の美術館の日本美術コレクションのデジタル化や当該館との共同研究プロジェクトにおいて、本拠点は大きな貢献、成

果を出した。結果、この3年間に、海外の日本研究機関からのデジタル・アーカイブのサポートに対する要請はますます強まり、本拠点が提案する海外サポート型デジタル・アーカイブ手法（国際型ARCモデル）をより一層普及させ、多くの機関において、日本文化資源デジタル・アーカイブを促進することができた（本年度までの実績：海外12ヶ国、52所蔵機関でデジタル化・共同研究を実施）。海外組織は、本拠点が用意する資源管理データベースを利用でき、それにより博物館・図書館の日常業務を進めるとともに、次第に本拠点のシステムを使って、収蔵品の一般公開を始めている。

以上のように、この3年間の活動により、デジタル環境下においても比較的研究手法の目立った革新のなかった歴史・文化・芸術分野において、デジタル・アーカイブによるDH型研究を促進し、人文学の新しい研究手法と新次元の研究環境を提供することに成功し、かつ日本文化資源のデジタル・アーカイブは飛躍的に拡大した。上記の目的は十分に達成できたと考えている。

#### [スタートアップ支援が拠点の当初目的の達成に与えた効果]

スタートアップ支援により、平成26～28年度の各年度とも専門研究員を1～2名雇用することができた。②欄に述べるとおり、専門研究員は拠点運営の基盤をなすテクニカル・サポートボードで役割を果たしており、本拠点の重要な推進力となった。また、デジタル・アーカイブに関わる拠点として、共同利用に供するデジタル化設備・機器、サーバ環境やデータベース環境の整備・増強は必須の課題であったが、同支援により本拠点の目的に適う環境を整備・アップグレードすることができた。デジタル・アーカイブ技術構築用素材ともなり、また学術資料として共同利用に供する研究資料についても、絵画資料を中心にスタートアップ支援によって整備した。結果、これらの研究資料を活用した共同研究課題が出現するなど、本拠点に対する同支援は、投資効果が大きかったといえる。さらに、拠点が保有する資料のデジタル化やデータベース構築に関わる必要経費も同支援から執行しており、同支援は上述の目的達成にとって決定的な役割を果たした。

## 2. 評価結果

### (評価区分)

S : 拠点としての活動が活発に行われており、関連コミュニティへの貢献も多大であると判断される。

### (評価コメント)

日本文化資源を研究対象とし、国内外の大学・研究所、博物館、美術館、図書館等との連携を図ることによって、日本の文化資源に焦点を当てたデジタル・アーカイブ化と蓄積されたデータベースの構築・運用、さらには、人文学や情報科学をはじめとする多分野に渡る共同研究が展開されていることから、拠点としての活動が活発に行われており、関連コミュニティへの貢献も多大であると判断される。

具体的には、スタートアップ支援を有効に活用することにより、資料のデジタル化やデータベース構築・運用の技術開発及び支援といった拠点のデジタル・アーカイブの研究推進をサポートする体制として「テクニカル・サポートボード」を設置するとともに、技術系と研究系の専門研究員を構成員とするなど、バランスの取れた支援体制が構築されている。また、デジタル技術と人文・芸術資料との有効な連携や、国内外の多くの機関との連携の推進、さらには、絵巻や浮世絵といった日本の美術品や工芸品等のデータベースを活用した分野横断型の共同研究を推進しており、研究成果の創出のみならず、新しい融合分野の人材育成にも貢献している。

今後は、機能強化支援を有効に活用しつつ、学内からの継続的な支援も得ながら、デジタル・アーカイブ技術及び研究手法の発展と、構築されたデータベースを活用した共同研究の一層の推進、さらには、研究コミュニティのみならず広く社会に利用されやすいデータベースによる情報の発信等によって、新たな学問領域の創出に向けた拠点機能の強化を図ることが期待される。